

公園のベンチ

一人の男、内藤が座っている。

公園内は子供達の無邪気なハシヤギ声が響き渡っている。

内藤は息子さんを遊びに連れてきてる。

自分の息子が楽しそうに遊んでるのをみてほのぼのとしている。

内藤 「ほら、一樹、ちゃんと順番守りなさい！

ネーネー達見てごらん、ちゃんと並んでるでしょ！

順番守れないんならもう帰るよー！」

内藤、自分の息子が言うことを聞いたのか満足した様子・・・

内藤 「そうそう、そうやってちゃんと後ろに並ぶんだよ！

こら、女の子の後ろはっかかりついて歩かないでちゃんと並びなさい！

ネーネーちゃん・・・

え？・・・違う違う！後ろ、後ろに並ぶのー！」

内藤、無邪気に滑り台を滑る息子を微笑ましく見てる。

内藤 「ん？もう一回？いいよ！何回でも滑りなー！」

内藤、立ち上がり、iphoneを取り出して子供の写真を撮ったりしている。

内藤 「え・・・？ ブラン」？・・・ネーネーたちと？

いいよ行ってきな！・・・だけどネーネー達の言うこと、ちゃんと聞くんだよ！・・・

はいはい、パパはここにいるからね！

ネーネー、ちゃんと一樹のことみてあげてね？」

内藤、再びベンチに座り今撮った写真を確認したりしている。

そこへ一人の男(マー君)がやってきて内藤の横に座る

マー君 「すみません、ここいいですか?」

内藤 「あっ、どうぞー!」

マー君 「すみません」

マー君、何かいいことがあったのか?鼻歌を歌いながらiphoneを操作している

内藤、そんなマー君の様子を見て、

内藤 「何かいいことあったんですか?」

マー君 「え?・・・」

内藤 「いや、その、とても楽しそうにしてらっしゃるんで、何かものすごくいい事でもあったのかな?とおもってますね・・・」

マー君 「・・・」

内藤 「いやその、例えば、宝くじが当たったとか・・・」

マー君 「・・・」

内藤 「ちがいましたか・・・」

マー君 「ええ、宝くじは当たってません、宝くじが当たってたらこんなに冷静じゃいられませんよ」

内藤 「ああ、そうですよね」

マー君 「そうですよ」

内藤 「じゃー、その、就職が決まったとか?」

マー君 「就職?仕事はしてますよ!えっ?仕事してないように見えますか?」

内藤 「いえ、そうじゃないんですけどね、その、あなたから出てくるオーラがですね、なんといいですか、その、とても幸せそうといいいますか、相当いい事が、ハッピーな事があったんだろうなと思ってますね・・・」

マー君うれしそうに

マー君 「そうですか?」

内藤 「はい・・・」

マー君 「出ますか?・・・オーラ・・・」

内藤 「はい」

マー君 「そうか、そんな空気出しちゃってるのか」

内藤 「はい……」

マー君ちよっと恥ずかしそうに

マー君 「いや、そのですね……」

内藤 「はい……」

マー君 「なんといいですか……その……」

内藤 「はい……」

マー君 「いや恥ずかしいな〜!!」

内藤 「……」

マー君 「えーとですね……」

内藤 「いや、別に無理して仰っていたなくても良いんですよ！私はね、ただ、あなたがとても嬉しそうにしてるので、何かいい事でも有ったのかな〜？と思っただけです
ら……」

マー君 「ええ、有ったんです……うふふ！」

内藤 「そうですか、よかったですね……」

マー君 「聞いてもらえますか？」

内藤 「えっ？……ええ、私、先ほどから聞いてますが……」

マー君 「あーそうでしたね……すみません」

内藤 「いえいえ……」

マー君 「あー、僕、今33歳なんですけどね……5年ぶりに……」

内藤、子供達の方に目が行き、大声で

内藤 「こら！一樹！何遍言ったらわかるの！女の子のお尻ばかり追いかけないの！ちゃんとネーネーのそばにいなさいー」

マー君 「???」

内藤 「えっもう帰る？ネーネーと帰ってテレビ観る？……もう少し遊んでなさいよ！パパ今このおじさんと話してるんだから……」

内藤、マー君の方を気にする

マー君 「あー、いいですよ、僕の事は気にしなくて……」

内藤 「いや、せっかくなので、あなたの幸せを……その素敵な気持ちのおすそ分けを頂き
たいな〜と思ひましてね……ちょっと待っててもらえます」

マー君 「はい……」

内藤 「一樹、ネーネー、チョットこちぎてー！」

内藤、袖の方に行き子供と何やら話し始める

内藤 「パパね、あのおじさんともう少し話したら帰るから、二人で先に帰って、ほら、
お金あげるから途中のファミマでアイスクリーム買って帰りなさい！」

内藤、しばらく、子供の事を見送って、

内藤 「はいはい、夜ご飯までには帰るから！今日の晩御飯は……すき焼きだぞ〜！」

内藤、何やら子供との決めポーズをしながら

内藤 「はい、レッツゴー……」

内藤、子供が見えなくなり、ベンチに戻ってくる。

内藤 「あ、すみせんね？」

マー君 「お子さんですか？」

内藤 「ええ、まー……」

マー君 「いいですね、おいしくですか？」

内藤 「上の娘が小学校4年生で、下の子が4歳です。まだちっちゃいくせに女の子が大好き
みたいで女の子見るとすぐ寄っていくんですよ！先が思いやられますね。」

マー君 「男が女性に寄っていくっていうのは永遠のテーマですもんね。いや、僕もです子供
の頃から女性見るとすぐ寄っていく子だったみたいです。まーでもその頃は女性を
恋の対象といますか、そういう感じで追っかけてたんではないと思いますけどね。」

内藤 「そうなんですかね……」

マー君 「大丈夫ですよ、小学校とかに行ったら今度は女の子と遊ぶのが恥ずかしくなって追っ
かけるのやめますから……」

内藤 「ならいいんですけどね……」

マー君 「2人ですか？お子さんは？」

内藤 「いや、その上に大学一年生の娘と中一の息子、下に8ヶ月の双子の女の子がいますね・・・全部で6人です。」

マー君 「6人?!?!?!」

内藤 「えー、お恥ずかしい限りです。」

マー君 「恥ずかしい？そんな事ないですよ、家族が多たっていうのはそれだけ奥さんと一緒にいる時間が多いという事ですもんね？」

内藤 「えーまあ・・・それがちよいと恥ずかしいといえますかね・・・いや、仲良しと言われるのは悪くないんですけどね・・・その子供が6人というのはね・・・ご近所さんからは好奇心旺盛な目で見られますね・・・」

マー君 「?????」

内藤 「まゝその・・・よっぽど好きなんですか？みたいなかんじだね・・・」

マー君 「なるほど・・・絶倫ですね？みたいな感じでみられるんですね？」

内藤 「まゝそうですね」

マー君 「はは・・・でもいいじゃないですか？」

内藤 「ん？」

マー君 「だって家族が多いと常に笑いが絶えないんじゃないですか？」

内藤 「ええ、おかげさまで毎日楽しく過ごさせていただいています」

マー君 「幸せなんですね・・・いいな」

内藤 「いやいや、貴方の方が幸せそうな顔してらっしゃいますよ。あくそつだ、さっきの続き聞かせてくださいよー」

マー君 「そつだ、聞いてくれますか？」

内藤 「はい、是非ー」

マー君 「え〜と、僕今33歳なんですけどね」

内藤 「はい・・・」

マー君 「その〜5年ぶりにですね・・・」

その時、内藤の携帯電話が鳴り出す。

内藤 「あっ、すいません。」

内藤、話を遮り電話に出る

内藤 「は〜い！パパでやんすよ〜・・・えっ？今日？今日はすき焼きだよ〜・・・ん？手巻きにしろ！・・・なんで？・・・なるほど、でももう無理だな！だってママがお肉買ってきてるもん。第一、今日は一馬のリクエスト優先なんだから、一馬がすき焼きがいいって言うんだから、すき焼きなの・・・わかってるでしょ・・・それに友達が来るたびに手巻きにしてたんじゃ、お前の家いつも手巻きだと言われちゃうでしょ！・・・えっ？ダイエットしてるから、肉食べれない・・・何言ってるの？肉は食べても太らないんだよ！それより手巻きでご飯山盛り食べる方が危険だぞ！・・・とにかく今日は手巻きじゃなくてすき焼きだから・・・はいはい、6時までには帰ってくるんだぞ！じゃー気をつけて！」

内藤、電話を切り

内藤 「あつ、すみませんね」

マー君 「すき焼きですか？」

内藤 「えーそうなんですよ・・・今日は長男の誕生日でしてね！我が家では誕生日の人が夜ご飯何にするかの決定権があるんです・・・」

マー君 「なるほど、それで手巻きは却下ですか！」

内藤 「そうですね。長女がね、なんか最近色気付いてきましてね、ダイエットするから肉はやめて魚中心の料理にしようとか言い出しましてね・・・朝ごはんだってバナナだけにしようとか・・・ダイエットするのはいいんですけどね、周りをまきこまないでほしいですよね。」

マー君 「まきこむ？」

内藤 「ええ、なんでもね、私がバナナで我慢してるのに、あなたたちが美味しそうにご飯を食べてるのを見るとイライラするから、みんなもバナナにしないって！みんなが同じもの食べてるんだ！ってなればイライラしないで済むからって！」

マー君 「ああ、なんとなくその気持ちわかりますね」

内藤 「まーそうなんですけどね、でもそのおかげで女房もダイエットに目覚めましてね、これを飲んだら3週間でごらんのウェストに！なんて商品が出たりするとすぐに買ってくるんですよー！」

マー君 「ありますね、本当に効果があるのかどうかわからない商品って・・・」

内藤 「いや、サプリ的なものならまだいいですよ・・・」

マー君 「??？」

内藤 「ほら、あるじゃないですか、ダイエットDVDっていうんですか?・・・ペリリーザブ

ートキャンプとか、デュークながしのウォーキングエクササイズとか・・・」

マー君 「はいはい、「RPGとかロングブレスダイエットなんていうのもありましたね?」

内藤 「あ、ありましたね、いやあの手のものを購入した時が非常に困るんですよね!」

マー君 「なんですか?」

内藤 「そのDVDが届くたびに家族みんなでやらされるんですよ!」

マー君 「みんなですか?」

内藤 「そうですねよ!」

内藤デュークの歩き方を真似しながら

内藤 「デュークながしの時はですね、全員で整列してこの歩き方を真似するんですよ!はたから見たら、おかしな家族にしか見えませんか?」

マー君 「はは、でも家の中だからいいじゃないですか」

内藤 「いやいやいや、うち屋上がベランダになってるんですけどね、こういうものは日光を浴びながら、光合成をしながらやるのがいいと女房が言うもんですからね、ポータブルDVDを屋上に持って行ってみんなで輪になって歩くんですよ!近所のビルの人からね、丸見えなんですよ!」

マー君 「へへ、面白いですね!」

内藤 「面白くないですよ・・・私気ついたんですけどね、ああいうのは1週間やそこらじゃ効果ないですよね!だいたいやり始めると毎日体重計に乗るんですけどね、全然体重が減らないですよ!一所懸命やっても体重が減らないとやる気なくなるじゃないですか?」

マー君 「まーそうですね・・・」

内藤 「で、一週間もするとみんな飽きてやめちゃうんですよ!」

マー君 「・・・」

内藤 「だから私いつまでたってもこんなお腹なんですよ!」

マー君 「・・・」

内藤 「お恥ずかしい限りです・・・」

マー君 「でもいいなく、家族みんなですんなることができるなんて・・・仲良しなんですよ」

内藤 「えー、仲だけはいんですよね!」

マー君 「幸せなんですよ・・・」

内藤 「えー、まー・・・あつところでオタクの話・・・」

マー君 「僕の話?」

内藤 「はい、オタクも幸せそうじゃないですか、そもそもその話を聞くために私、ここに残

ったんでした。すいません自分の話ばかりしてしまっ—！」

マー君 「いえいえ……」

内藤 「で、何があったんですか？」

マー君 「いや、もういいですよ……」

内藤 「なんですか、いいじゃないですか？聞かせてくださいよ」

マー君 「いやいや、大したことじゃありませんから」

内藤 「ずるいなく私にばかり話させて……」

マー君 「ずるいって……自分で話したんじゃないですか！」

内藤 「まあまあそんなんですけどね、ききたいなく！あなたの幸せ話！」

マー君 「いえいえ、オタクの幸せに比べたら……」

内藤 「いいじゃないですか……聞かせてくださいよ！」

マー君 「そう改まられると余計話しくらいですよ」

内藤 「じゃーさわりだけでも聞かせてくださいよ」

マー君 「さわりだけじゃわからないですよ！」

内藤 「まーそんなんですけどね……」

少しの間

マー君 「じつは……私今年33歳なんですけどね……その……5年ぶりに彼女がで
きましてね……」

内藤 「ほうほう、それはそれは、おめでとうございます。」

マー君 「あっ、ありがとうございます。なにしろこの5年間は振られまくってきた生活でした
からね……あー、それですね、その彼女がですね、今日お店予約して、席とっと
くから絶対に来てねと先ほどLINEがきましてね」

内藤 「おー愛されていますね！いい娘だなー！もうあなたにへタ惚れなんじゃないかね？」

マー君 「そうおもいます？」

内藤 「思いますよー！だってそつでしょー！自分でお店予約して、そこに来てね、なんてね……
だいたいデートってというのは、なんていうんですか、その～男の方が、色々とプラン
を練ってあの手この手を駆使して彼女を悦ばせようとするもんじゃないですか？」

マー君 「まーそつですかね……」

内藤 「そつですよー！それだけ女性が積極的になるといっことはですよ、あなたのことを大好
きだからじゃないですか……！……」

マー君 「やっぱのそつ思いますか？」

内藤 「そりゃ思いますよーあなただってそういう献身的なところに惚れたんでしょー！」

マー君 ちよっと照れながら

マー君 「マー、マメに連絡はしてくれませぬ！早く会いたい！今度はいつ会えるのかな〜ってねー昨日もですぬ、今日も会えなかつたね？寂しくーなんて連絡が来ましてね」

内藤 「う〜この〜この〜！」

内藤、マー君の肩を思い切り叩く

マー君 「痛い痛い、ちよっとやめてくださいよ」

内藤 「で、その彼女と付き合ひ始めてどれくらい経つんですか？」

マー君 「今日でちよつと一週間です。」

内藤 「わ〜いいな〜もう、まさに幸せ真っ只中ですね！・・・毎日でも会いたいですよ〜」

マー君 「いや、仕事が忙しくてなかなか会いに行けてないんですよー！」

内藤 「ありやりや、・・・あいたいでしょ〜？」

マー君 「え〜あいたいです」

少しの間があつて、内藤、またまたマー君の肩を叩きながら

内藤 「う〜、この〜この〜！」

マー君 「だから〜痛いからやめてくださいよー！」

内藤 「で、今日が一週間ぶりに会える日なんですか？」

マー君 「そうなんですよーふふ、初デートなんです。しかも今日、彼女の誕生日なんです。」

内藤 「え？うちの長男と一緒にやないですか？何て名前ですか？」

マー君 「えっ征之ですけど・・・あ〜マー君でいいですよ、みんなそう呼んでるんで」

内藤 「あ〜、マー君ですね・・・いやいやいやあなたじゃなくて、その彼女さんのお名前は何？」

マー君 「なんでですか？名前聞いてどうするんですか？」

内藤 「いやいやいや、息子と誕生日が一緒なんてね、ちよっと親近感湧いちゃいましてね」

マー君 「あーなるほど・・・えー、彼女の名前はマリアです。」

内藤 「マリアーう〜んなんかゴージャスな名前ですねーマリアさん・・・うん、でそのマリアさんと、今日はどちらでデートなんですか？」

マー君少し照れながら

マー君「お店です」

問

内藤 「え〜ですから、どちらのお店で？やっぱり初デートなんだから、銀座とか六本木とかの高級料理店に行ったりするんでしょうね！」

マー君 「銀座なんて、高級なところ行けませんよ！」

内藤 「でも初デートなんでしょ？マリアさんだから少しぐらい奮発しないと！」

マー君 「なんでマリアだと奮発しなきゃいけないんですか？」

内藤 「いや、マリアって名前の人は、そこらへんの焼き鳥屋とかには、いかなそんな雰囲気じゃないですか」

マー君 「いきますよ！へんな偏見持たないでくださいよ！」

内藤 「じゃーじゃーどこに行くんですか？」

マー君 「彼女のお店ですよ！」

内藤 「ん？？？？？彼女の？」

マー君 「はい、彼女のお店です。」

内藤 「彼女のお店？・・・あ〜マリアさんは小料理屋か何かを経営されてらっしゃるんですね・・・」

マー君 「いやいや、彼女のお店ではなくてですね、彼女のバイトしてるお店です。」

内藤 「バイト？？？？」

マー君 「はい」

内藤 「なんでバイトしてる店なの？」

マー君 「なんでと言われましても・・・」

内藤 「誕生日なんでしょ？誕生日に彼女のバイトしてるお店で食事ですか？それじゃー二人でしっぽりと言っ訳にはいかないじゃないですか！いいですか、一週間ぶりに会えるんですよ！しかも今日マリアさんの誕生日なんでしょ？・・・誕生日に会うのにそれじゃダメですよ！・・・彼女にはバイトを休んでもらってどこかお店を予約しましょう！そうだなー、あ〜銀座にですな私の知ってるお店があるんですよ、そこでよければ私紹介しますけど・・・」

マー君 「いや、彼女がお店に来てと言ってるので、大丈夫ですよ、その方が売り上げに貢献で

きるし、多分ノルマも厳しいんだと思います。」

内藤 「ノルマ？」

マー君 「はい……」

内藤 「ノルマって何ですか？ノルマがあるお店ってどんな店ですか！」

マー君 「キャバクラですよ！」

内藤 「ん？？？？」

マー君 「彼女がバイトしてるキャバクラですよ！なんでも売り上げのノルマがあるらしくてです……」

内藤 「キャバクラですか……」

マー君 「はい……しかもですね今日、誕生日じゃないですか？誕生日週はノルマが跳ね上がるらしくてですね……普段の1.5倍のノルマが課せられるらしいですよ！」

内藤 「は……」

マー君 「ですから少しでも売り上げに貢献するためですね、今日お店に行ったらボトルでも入れてあげようかなと思ってるんです。それがマリアが一番喜ぶことになって思ってますね。」

内藤 「は……」

マー君 「あっ、それとは別に花束とか持って行った方がいいんですかね、マリアはですね、花をもらえるならガーベラがいいな〜と言ってたんですよ！でね、ピンクとオレンジと黄色のガーベラを山ほど持って行くこうと思ってるんですよ！」

内藤 『ピンクとオレンジと黄色のガーベラ？』

マー君 「はい、ガーベラご存知ですよね？」

内藤 「えー、ま……」

マー君 「ガーベラっていろんな色があるじゃないですか？それでね、調べたんですよ、ピンクのガーベラはですね、愛や美の意味を持ってるんですよ、でオレンジがですね、神秘、冒険心という意味を持ってるんですね……二人の神秘的な愛を追求して、新しい人生の冒険にでる！二人の門出にはもってこいですよ……そして極め付けが黄色のガーベラです。黄色のガーベラにはですね『究極愛、究極美』という意味があるんですよ！僕とマリアの究極の愛を育てるには、うってつけの花なんです。」

内藤 「あの……」

マー君 「あれっ？やっぱり花束とかじゃくて、指輪とかネックレスとかのアクセサリの方がいいんですかね？」

内藤 「いや、それは別にどちらでも喜んでくれると思いますよ、あなたの気持ちがかもつてれば、どんなものでも良いと思いますよ……しかしですね……」

マー君 「そうか・・・じゃーやっぱりガーベラにしますね!」

内藤 「いや、あのですね、ちょっといいですか?」

マー君 「はい?」

内藤 「大丈夫なんですか?」

マー君 「大丈夫ですよ!ほら僕5年間彼女もできずに独り身だったじゃないですか?ギャンブルとかも好きじゃないし、一人だとあまりお金使わないんですよ?ですから、それぐらいの出費は大丈夫ですよ。

内藤 「いや、そうじゃなくてですね、その、マリアさんとはですね・・・一体どこでお知り合いになったんですか?」

マー君 「え?」

内藤 「いや、ちょっと気になったもんですからね・・・」

マー君、その時のことを思い出し、ニヤニヤしながら

マー君 「アンジェリカです!」

内藤 「ん?あゝそのマリアさんがバイトしてるアンジェリカというお店で出会ったんですね?」

マー君 「違いますよ!お店の名前はエンジェルです?」

内藤 「は?・・・エンジェル?・・・え?ではそのアンジェリカというのは?」

マー君 「あーすいません、道端です。」

内藤 「はい?????あのゝまます意味がわからないんですが?????」

マー君 「あれ?知りません道端3姉妹・・・」

内藤 「ん?????あゝ道端だから、アンジェリカですか・・・」

マー君 「はい、3姉妹だったらやっぱりアンジェリカですよね」

内藤 「誰でもいいですよ!ややこしいなゝもっ!」

マー君 「すいません・・・」

内藤 「で、そのアンジェリカというか、道端というか、要は路上ですよね?その路上でぶつちやって出会ったんですか?」

マー君 「・・・マリアがですね、お店のチラシを配ってたんです。」

内藤 「チラシ・・・」

マー君 「はい、もう僕の一目惚れでしてね、ちょうど一週間前、会社の飲み会があったんですよ、その集合場所の居酒屋が見つからなくて迷ってたんですね、そしたらマリアが僕のところに寄ってきましてね、声かけてきたんですよ。もっぴっくりですよ、こんな

可愛い子が僕なんかに声をかけてくるわけない、きっと人違いだろうなってね……」

内藤 「ほーほー」

マー君 「本当に可愛かったんですよ、他にもたくさん人がいたのに、なんていうんですか後光が差すというか、マリアの周りだけが輝いてたんです。」

内藤 「うんうん、で、なんて声をかけられたんですか？」

マー君 「はい、『おにいさんどこかお店お探しですか？』って……」

内藤 「やっぱり……」

マー君 「ん？？？？」

内藤 「いやいや、それで？」

マー君 「ちょうどいいやと思って探してるお店の名前を伝えたんです。そしたら、『すぐ近くですから一緒に行きましょうー！』って言って僕の手を引っ張って連れて行ってくれたんです。その時にですね、この娘はただ可愛いだけじゃない、心も綺麗で優しいん娘なんだなって思いましたね……そしたら、『この飲み会が終わってまだ元気だったらうちの店にも遊びに来てくださいね、待ってますからね……来てくれるまでずっと待ってますからね』って……そこまで優しくされたんだからこちらも行かないわけにいかないじゃないですか……で、飲み会が終わった後マリアのお店に寄ったんです。」

内藤 「……」

マー君 「だってそうでしょ、自分なんかには到底、手が届かないだろうと思ってた女の子が来てくれるまでお店で待ってるって言ってくれたんですから、行かないと失礼じゃないですか？」

内藤 「……」

マー君 「きつとあなたがあの場所にいるもそうしたと思いますよ」

内藤 「いいカモですね」

マー君 「いやいやカモじゃなくて、いいんです。」

内藤 「うーいいカモじゃなくて、鳥の鴨です。バーンって打つほうの……」

マー君 「はい？」

内藤 「悪いことは言いません、そのマリアさん……うんきつとマリアさんはですね、マー君の事を彼氏だなんて思ってないと思いますよ。」

マー君 「は？……何言ってるんですか突然」

内藤 「いや、あのですね、おかしいと思いませんか？」

マー君 「……」

内藤 「思わないんですね……ではお聞きしますが、そのお店に行つて、それからどうしたの

れたんですか?」

マー君 「どうとは?」

内藤 「お店に行って、どんな会話をされたんですか?」

マー君 「どくなって、普通の世間話ですよ!僕の仕事は何してるとか、年収はいくらだとか、貯金がいくらあるかだとか、家は持ち家か?車は持ってるか?とかです。」

内藤 「やっぱり?」

マー君 「やっぱりって何ですか?」

内藤 「だって一週間前に、アンジェリカでチラシ渡されて、お店に行った、ただのお客さんじゃないですか!・・・会話だって全部お金がらみだし・・・きっと、そのマリアさんはですね、あなたにお店に通ってもらって、お金をたくさん落としてもらいたいぐらいにしか思ってないじゃないんですかね・・・それから一週間会えてないんですよ?・・・今日の誕生日だって、誕生日というイベントがあるからお店に来てと言われたんじゃないですか?・・・きっとマー君みたいに今日お店に呼ばれてる男の人は何人もいますよ!・・・だいたい、なんでマリアさんが彼女になっただと思っただんですか?ちゃんとさういう、え、なんといいですか、お付き合いしませうようなやりとりはあったんですかね?」

マー君 笑い出す・・・

マー君 「はははは・・・何言ってるんですか?」

内藤 「ん?・・・」

マー君 「いいですか、お店にお客さんをたくさん呼ぶっていうのは、商売をやったら当たり前前の事じゃないですか!一人でも多くの人に来てもらっておもてなしをする。そしてその分の報酬を頂く・・・そんなの中学生の子供でを分かる話ですよ。」

内藤 「ええそうですね、だから、マー君も、その大勢の人の内の一人のお客さんと呼ばれたんじゃないですか?」

マー君 「わかってないですね〜!僕がお店に行った時、マリアはですね、ずっと僕の隣に座ってたんですよ?他の顔見知りのお客さんが来ても、そちらには行かずに僕の席から離れる事なかったんですから・・・」

内藤 「ですから、それはあなたがマリアさんを指名したからですよ。」

マー君 「指名?」

内藤 「はい、お店に入った時マリアさんお願いしますと言いませんでしたか?」

マー君 「何言ってるんですか・・・そりゃ言うに決まってるじゃないですか、マリアに会いに

行ったんですから。」

内藤 「ま〜ま〜そうですねー！」

マー君 「それにですね・・・乾杯の時に・・・二人の出会いに乾杯って・・・二人の出会いに乾杯ですよ？・・・もつこの時点で特別な存在なんだなって事になるんじゃないんですか？」

内藤 「・・・」

マー君 「きっとマリアもですね、アンジェリカで僕と出会った時に」

内藤 「路上ですよね？」

マー君 「何か感じるものがあつたんでしょうね。だからわざわざ迷ってる僕の事をお店まで案内してくれたし、そのあと来てくれるまで待ってるなんて言葉が出たんでしょうね。初めて出会った時からぼく達はお互いが運命の人と感じたんですよ・・・」

内藤 「・・・そうですか・・・運命の人ですか・・・」

マー君 「はい！」

内藤 「まーあなたがいいんじゃないんですけどね・・・」

内藤、時計を見て立ち上がり

内藤 「すみません私、そろそろ時間も時間なので失礼しますね・・・」

マー君 「あ〜そうでしたね、おたくも今日、誕生日なんですよんね、息子さんでしたっけ？・・・おめでとつございます。」

内藤 「ありがとうございます・・・あっ申し遅れましたが私、内藤と申します。それでは失礼します。」

マー君 「ではまた・・・」

内藤 「あ〜、マリアさんとうまくいくといいですね・・・頑張ってくださいねー！」

マー君 「ありがとうございます」

内藤 「では・・・」

内藤、はける

一人残されたまーくん、携帯を出し何やら録音されてるメッセージを再生する
そこにはマリアの声が入っている

『マー君、マリアです。今日はなんの口でしょうっ？』

正解は〜、マリアの誕生日です。

誕生日なんだからもちろんお店に来てくれるよね？

お店予約してるから絶対来てね？

来てくれなかったら、マリア寂しくって死んじゃうぞ〜！

マリアはウサギと一緒にんだからね・・・だから絶対来てね・・・

一緒にお祝いしてくれたらマリア超〜うれしい〜！

じゃー待ってるからね〜』

マー君そのメッセージを聞きながらとても幸せそうな顔をする

ゆっくくり暗転